新宗連スローガン
信教の自由を守ろう
信仰心を広めよう
宗教協力を進めよう
世界の平和に貢献しよう

新宗教新聞

2021年（令和3年）
2月27日
第1128号

発行所
新日本宗教団体連合会
（略称 新宗連）
〒151-0053
東京都渋谷区代々木5丁目57番10号
電話（03）3468－5551〈代表〉
（03）3468－5588〈編集〉
大阪事務所 〒550-0006
大阪市西区江之子島1丁目8番21号111
電話（06）6443－7178

新宗連 第31期第3回理事会

令和3年度 事業計画を承認

結成70周年記念事業は4月から推進

オンラインで開催した理事会、各審議事項を承認した

新日本宗教団体連合会（新宗連、岡田光央理事長）は2月25日午後1時半から、オンラインで「第31期第3回理事会」を開催した。今回の理事会では令和3年度の事業計画及び予算について承認し、新宗連が結成70周年を迎えるにあたり、事業計画に「あゆみのふりかえり（内省）」と新たな役割の模索が謳われた。70周年記念事業については新型コロナウイルス感染状況等に配慮し、4月から推進していくことを申し合わせた。

理事会は冒頭、昨年12月に逝去した新宗連元副理事長でパーフェクト リバティー教団第3代教祖、御木貴日止師の冥福を出席者一同で祈念した。

深田充啓名誉会長、岡田光央理事長の開会あいさつの後、岡田理事長が議長を務め議事に移った。報告事項は、各委員会・機関と新日本宗教青年会連盟（新宗連青年会）、文化庁宗務課からの「宗教法人が行う社会貢献活動について（情報提供）」（『栞』参照）など。

審議事項では、令和3年度事業計画案及び同予算案を協議。令和3年度事業大綱に基づき、1月19日の事業計画策定会議を経て作成された計画では、新型コロナウイルス感染予防対策を講じながら、例年通り講座やセミナーの開催、青少年育成活動などの事業を提案。また、各事業に共通する方針として「特に本年は、結成70年を迎えた新宗連のあゆみをふりかえる（内省する）とともに、これからの新宗連の役割を探求する」との一文を追記することが提案された。協議の結果、事業計画・予算ともに原案通り承認した。

事業計画・予算と併せて新宗連結成70周年記念事業と新宗連青年会60周年記念事業についても確認した。

70周年特別委員会委員長の江口陽一常務理事と宮本泰克新宗連青年会委員長が説明。70周年記念事業については当初、今年1月から事業を開始する予定であったが、新型コロナウイルス感染状況に鑑み、4月から開始することを承認した。続いて「会員及び会費に関する規程」について審議を行い、現状に合わせ改訂をすることを提案し、一部追記を行うこととし承認した。

また、新型コロナウイルス感染症対策に伴う新宗連全体の運営方針についても協議。オンラインを原則とするなどのこれまでの方針の継続確認を行った。

全審議事項終了後、理事らによる意見交換が行われ、70周年を迎える新宗連への期待や要望、コロナ禍における宗教活動などについて多様な発言があった。

東日本大震災から10年―

「3・11」を忘れない

体験を振り返る 私の願い・祈り

東日本大震災から10年―。教団・教会の責任ある立場にあり、信者会員に寄り添い続けた東北の新宗連加盟教団の方々に、当時を振り返っていただき、現在の思い・願いを寄稿していただいた。

苦難の中、信仰が力の根源に

大和教団事務総長 平松千明

その瞬間、私は仙台市内の本部3階の執務室におりました。揺れが大きくなるにつれ、建物崩壊の恐怖が脳裏をよぎりましたが、そんな最中、一人の女性教師が力強く神言を唱えており、その声になぜか大きな安心を得たことを覚えております。

本教団は主要教区が東北の沿岸部に集中しております。当然、信者さんの安否が一番に心配されましたが、なすすべもなく、何も出来ない無力さを感じながら時間だけが過ぎて行きました。翌日から無事の知らせが届き始めましたが、それは束の間の喜びでした。その後は次第に訃報や行方不明の連絡が主となって参りました。

そんな折り、当時職員であった福島県南相馬市出身の男性のご両親がご遺体で発見されました。その男性は「良かったー、両親見つかった。損傷も少なくて有り難いわ」と。ご両親は車での避難中に津波に襲われ、車中のご遺体は綺麗なお姿であったとのことでした。ご両親が帰幽されているのに「良かった、有り難い」と思わなければならない程、常軌を逸した日常でございました。

本部が被災し、主要な分祠、教会も壊滅状態のため、対策本部としての機能も果たせず、本当に切羽詰まった状態でした。そんな中、立正佼成会様、円応教様を始め、多くの新宗連加盟教団からの物心両面のご支援を賜りました。勇気、そして何よりも生きる力を賜り、命を繋げることが叶いました。この御恩は一生忘れることなく、末代までも語り継がなければと思っております。

当時、一番の課題は信者さんからの「こんなに信仰しているのに」「神様を信じていたのに」「どうして？」「何故？」との思いに向き合うことでした。被災された方々には正直、信仰に対する揺らぎや疑念も生じたかと思います。

そうした方々との交わりの中で確信致しましたこと、それは心に寄り添えるのは、理屈や理論ではなく、祈りの力、信仰信念であるということです。保積秀胤教主様の祈りのお姿に皆どれ程のお救いを頂けたことでしょうか。如何なる苦難に見舞われても、信仰が力の根源であったことは紛れもない事実でございます。

あれほどの辛く悲しい経験でございましたが、年々風化の感は否めません。そんな中、2月13日深夜、東北地方はまたも大きな揺れに襲われ、あの日の恐怖が鮮明に蘇りました。風化させてはならないとの神仏からの警告でありましょうか。津波がなかったことは本当に不幸中の幸いでした。

現在コロナ禍の中、大変困難な生活を強いられておりますが、行政の出来ることには限界がございます。今後、宗教の役割がさらに求められていくものと確信をしております。

石巻、平の2教会での学び

立正佼成会郡山教会長 安井利光

10年前の3月11日、当時、私は立正佼成会石巻教会長を務めており、教会から約40㌔離れた信者さん宅で被災しました。教会へ戻れたのは13日のお昼です。その後は、限られた方と、避難所を廻り、安否確認の日々でした。

多くの皆さま方のご支援が何よりの原動力でした。共に生きようとするエネルギーは失われず、8月13日には市内の鹿島御児神社で明るい社会づくり運動石巻推進協議会主催による「東日本大震災 石巻祈りの集い」が開催され、私も出席しました。10の宗教宗派の代表、市民、会員ら約120人が参列し、震災後の新盆にあたり、犠牲者の鎮魂と復興を願いました。この祈りの集いは、毎年行われております。

東日本大震災 石巻祈りの集い（2011年8月）

10月には立正佼成会一食運動石巻推進協議会主催による「東日本大震災 石巻祈りの集い」が開催されました。

津波で流出した南三陸支教会の跡地で祈りを捧げる保積秀胤教主（2011年4月）

核兵器のない平和な世界を祈念

核兵器禁止条約の発効受け声明

日宗連

日本宗教連盟（戸松義晴理事長）は1月22日、核兵器禁止条約が発効されたことを受け、同日、「平和な世界の実現を祈念して」と題する声明を発表した。

声明は2017（平成29）年以降の条約発効に至る経緯や、被爆者の辛く苦しい体験と平和実現への願いなどに言及した後、「世界で唯一の戦争被爆国日本の宗教者である私たちは、ここに改めて核兵器のない平和な世界の実現を祈念いたします」と記している。

滴々抄

「地球カレンダー」の警鐘

自身の心をいかに変異させるか

1年ほど前には全く思いもしなかった新型コロナウイルスの世界的な流行。まさに世の中が一変してしまった感がある。

わが教団でも感染に注意しながら、出来得る限りの祭典・行事を行っているが、人と会う機会が極端に減ったことが今後どのような影響を及ぼすか心配の限りである。私自身、もう1年ほど電車に乗っておらず、乗り方を忘れてしまいそうである。

さて、話は変わるが、「地球カレンダー」なるものがあるのをご存じか。諸説あり真偽のほどは疑問だが、地球誕生の46億年前を1月1日、現在を12月31日の年明け前として考える1年の暦である。

地球では誕生以来、さまざまな気候変動・地殻変動を繰り返し、そして植物も含めその環境に適した多種多様な生物が育まれてきた。私たちになじみのある魚類が生まれたのはカレンダーでいうと11月20日。恐竜が全盛期を迎えたのは、年も押し迫ったクリスマス12月25日とのことである。

さてさてわが人類の祖先といわれるホモサピエンスの出現は？というと大晦日12月31日の23時37分、そろそろ紅白も蛍の光の合唱の時間である。

今年は西暦2021年だが、これの基点となるキリスト様の誕生は23時59分46秒。わずか14秒前でしかない。地球温暖化も深刻な問題だが、その遠因は18世紀中頃イギリスから始まる産業革命といわれる。それはこの地球カレンダーでは23時59分58秒、わずか2秒でしかない。

このわずかの間に人類は地球をこのように汚してしまったのかと思うと、コロナウイルスの発生も人類に対する警鐘と思えて仕方がない。

今後、このウイルスもさまざまな形に変異していくだろうと予測される。ワクチンの効果に大きな期待を寄せるが、それに準じて我々も自然治癒力・自己防衛力を身に付けていかなければならない。

しかし、それ以上に大切なことは、我欲だけに執着する自身の心をいかに変異させるかということではないか。

（新井光興・救世真教会長）

栞（しおり）

宗教法人が行う社会貢献活動について（情報提供）

文化庁宗務課が1月25日付けで日本宗教連盟（日宗連）に送った事務連絡の通知文書。「宗教活動」に資する宗教法人の境内建物等の固定資産税は非課税であるが、社会貢献活動の一環として、地域のために災害備蓄品などを保管した場合、それらは「公益活動」とみなされて固定資産税が課税される可能性がある。通知文書では、各宗教法人がそれぞれの判断に基づき、社会貢献活動も「公益活動」ではなく「宗教活動」と整理することが可能との考えが示されている。2月2日に日宗連は同文書の周知を行うとともに論点整理を発表した。（1面）

《今号の紙面から》
〈2面〉 新宗連青年会・第10回沖縄慰霊平和使節団事前学習会、新型コロナウイルス禍による宗教や人権、差別に関するシンポジウム・学習会
〈4面〉 連載「現代社会と宗教④―バーチャル世界の可能性」
（次号発行は4月下旬の予定です）

解脱会伝記編纂委員会編
新版 解脱金剛伝 全3巻
A5判 上製函装 定価3000円（税込み）
世相善導、人心救済への道筋を説かれた解脱会会祖・解脱金剛（岡野聖憲）の生涯を全1549頁、3巻に収めた。会祖亡き後、その人格に触れて自らの内に深い帰依心を培い、世のため人のために生きるための学びの土台となる書。第1巻＝生誕から事業の失敗、大成を経て宗教の世界に目覚めていく前半生を描く。第2巻＝昭和4年に立教して以来、人心救済の道一筋に生き、教えの土台を完成するまでの事績を辿る。第3巻＝戦時下の厳しい時代の中で縦横無尽に教えを説き、救済活動を展開し、遷化されるまでの歩みを記す。
解脱会
〒160-0007 東京都新宿区荒木町4番地
TEL 03-3353-2191(代表) Fax 03-3353-3055

清文社
宗教法人の税務調査対応ハンドブック〔宗教法人税制と法制の解説を含めて〕
石村耕治 編
A5判3780円
平成25年からの新・税務調査手続にも対応！
宗教法人と税務調査についての基礎知識を中心に整理し、コンパクトに解説した、実務家・宗教関係者必携の一冊。
公益財団法人 日本宗教連盟推薦！
〒101-0047 千代田区内神田1-6-6
☎03(6273)7946 FAX03(3518)0299
http://www.skattsei.co.jp〈価格税込〉

芸術生活社【芸生文庫】
御木徳近著
老春謳歌（おうか） 長生きの秘訣
高齢期を快く生きるための“人生の道しるべ”
パーフェクト リバティー教団第二代教祖が、宗教家としての悟りと長い人生経験、多くの人との出会いから、高齢期を心豊かに暮らすための新しい生き方を提唱する。■定価700円（税込）
〒150-0047東京都渋谷区神山町16-1
電話03-3469-1153 FAX03-3465-6867

南雲堂
美容と健康寿命の秘策！
認知症予防★お口の体操
『みんな笑顔、みんな元気！』DVD
監修・作詞：太田哲二 作曲：森重恭典／歌・実演：恵中瞳
定価（本体2000円+税）
（体操解説・歌詞収録のブックレット付）
●収録内容（歌と体操の実演）
▣アッカンベー体操／舌の動きや首を回して、筋肉を活性化させて、リンパの流れを良くする。▣パタカラ体操／魔法の言葉『パ・タ・カ・ラ』を使って口を大きく動かして脳に刺激を与え、認知症予防！▣ラップ・ラップ体操／早口言葉や落語の寿限無をラップのメロディにのせて歌うことで手・眼・口・全身の運動機能を向上させる。
〒162-0801 東京都新宿区山吹町361
☎03-3268-2311 FAX 03-3260-5425
http://www.nanun-do.co.jp/

佼成出版社
現代人のための仏教説話50
窪島一系 著
◎四六判／256頁
◎定価1650円（税込）
欲にまかせた行動によって悪の報いを受けたり、清らかな心で人に施して悟りを得たりするなど、人間味豊かな登場人物が織りなすエピソードを通して、仏教の教えを説いた仏教説話を50話選集。
宗教に明日はあるか？
宗教間対話座談会 中央学術研究所 編
6人の研究者による熱い討論の記録。
◎A5判／344頁
◎定価2200円（税込）
〒166-8535 東京都杉並区和田2-7-1
☎03(5385)2323 FAX03(5385)2334
https://books.kosei-shuppan.co.jp/

白馬社
合掌ができない子どもたち
浄土真宗本願寺派福賢寺住職 三上章道
四六判 定価1260円
『本願寺新報』の編集長を二十年に亘って務めてきた著者が、合掌ができない子どもたちとの出会いを契機に、戦後の日本社会が戦慄すべき「薄縁社会」となったプロセスを追い、その原因が宗教心の喪失にあることを解き明かす。そして新たに現出した「原発問題」にも、同根の原因があることを洞察していく。日本人の心の問題にする迫り、根本的解決への提言をまとめた必読書。
〒612-8469 京都市伏見区中島河原田町28-106
TEL 075(611)7855 FAX 075(603)6752
http://www.hakubasha.co.jp 価格税込

ハーベスト社
東日本大震災後の宗教とコミュニティ
星野英紀・弓山達也編 本体価格7200円+税
東日本大震災後の福島県いわき市と相双地域のコミュニティの再建における宗教の役割（避難場所としての宗教施設、宗教教団や宗教者の動向など）を解明する。
療術から宗教へ
世界救世教の教団組織論的研究
隈元正樹著 本体価格3000円+税

緊急出版 カトリック大阪教区神父 西山俊彦
平和憲法が平和への道、改憲は戦争への道
―わたしたちが核戦争の加害者とならないために―
世が平和ボケにあろうとも、「時すでに遅し」と後悔しないために、平和憲法の真価を見直す素養まで捨てるわけにはいかない。
●1400円＋税 四六判並製
248頁 ISBN 978-4-286-19691-6
文芸社
〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1
☎03-5369-2299 FAX.03-5369-3066
https://www.bungeisha.co.jp
書籍のご注文はお近くの書店またはブックサービス☎0120-29-9625、ネット書店まで

第10回沖縄慰霊平和使節団事前学習会

沖縄を学び伝え続ける

金城リンダ氏を講師に―新宗連青年会

新日本宗教青年会連盟（新宗連青年会、宮本泰克委員長）は1月31日午後1時から、オンラインで「第10回沖縄慰霊平和使節団事前学習会」を開催した。

今年2月16～19日の日程で派遣予定であった第10回沖縄慰霊平和使節団は新型コロナウイルスの感染状況に鑑み中止となったが、事前学習会は予定通りオンラインで開催。これまで事前学習会は使節団の参加者のみを対象としていたが、地方在住の加盟教団青年らもオンラインで参加可能となり、あらためて沖縄の歴史、沖縄の戦中や戦後の状況などについて学んだ。

はじめに宮本泰克委員長があいさつ。使節団派遣は中止となったものの、「沖縄のことは忘れてはいけない、学び続けていかなければならないという思いで学習会を開催した。本日学んだことを基に慰霊の心を一つにできれば」と学習会開催の意義を語った。

続いて、橋本浩志事務局長がこれまでの使節団の概要を説明し、第10回の使節団で実施予定であった行程を紹介した。

続いて、沖縄ナビゲーターの金城リンダ氏が講演。金城氏は沖縄生まれのペルー日系2世で、沖縄の歴史や社会、海外移民について研究をしており、現在ではオンラインセミナーの講師を務めている。

金城氏ははじめに沖縄で生まれブラジルで幼少期を過ごし、また沖縄に帰ってきた自身の経歴に触れ、「自分はどこに属するのか」と所属に対して不安定な意識を抱えていたことを話した。そのような自身の境遇と、様々な支配により所属の変わってきた沖縄の歴史を重ね合わせるようになり、沖縄について内外で語る活動をするようになったと振り返った。

沖縄の歴史―琉球王国、沖縄戦、戦後の基地問題

続いて、琉球王朝時代について話し、琉球は主権国家として様々な国と貿易をしており、「万国津梁」（様々な国の懸け橋となること）を掲げ、諸国間の仲を取り持ち、平和をもたらすとの哲学があったと説明。他方で、本島以外の地域では重税が課されるなどの内部での差別があった事実も指摘した。

明治以降、沖縄県となり、日本軍による基地建設が行われ、その跡地が現在の米軍基地として使用されており、基地問題の遠因となっていることを示唆。また、沖縄戦では県民の4人に1人が犠牲となり、「軍官民共生共死」と言われ、軍人も民間人も生死をともにする過酷な状況があったと説明し、中でも「集団自決」は軍の情報を漏らさないためにも「強制された」側面があると指摘した。

その後の米軍占領下においては、土地の強制接収や人権侵害などの多くの問題が起き、日本復帰にあたり、人権擁護と米軍基地撤廃の期待が高まったが、49年を経た今でも基地が残り、事件事故が多発していることを説明。基地周辺での人々は「空から何かが落ちてくることを心配する生活」を送り、「日々ストレスを抱えている」と話した。

また、米軍基地に経済的に依存しているとの指摘があることについては、基地が返還された跡地では再開発が進み、税収も増えている事例があることから、基地がなくてもいいとの思いが沖縄の中で高まっているとも指摘した。

犠牲者としての「戦争経験者」への認識を

続いて、自身が海外で沖縄の歴史を語る中で気付いたこととして、日本では「戦争犠牲者」の話しかしないことを挙げた。「犠牲者」は戦争で亡くなった人のことであり、戦争後も生き残った人々にも被害があり、犠牲を強いられていたにもかかわらず、「経験者」としての位置付けしか与えられていないと指摘。戦争を生き残った人々は心の傷も、金銭面的にも、十分に癒されることはなかったのではないかと問いかけ、これから語り継いでいく際には、生存者も犠牲者であるとの認識を持つ必要があると語った。

また、沖縄の歴史を伝える際に心掛けていることとして、沖縄の影（犠牲）の側面だけでなく、光（魅力）の側面も話すようにしていると語り、その両方を話すことで聞き手に届きやすくなるのではないかと述べた。

質疑では今後の記憶の継承の在り方について質問が及び、金城氏は「経験者しか戦争を語れないわけではなく、現在の沖縄では経験していないからこそ継承し、語り継ごう、私たちは語る側なんだという自覚が生まれつつある」と話した。さらに戦争を経験していないからこそ、愛憎を超えて、海外の人たちがどのように受け取っているのか、冷静に、謙虚に学び合うことができると、可能性を指摘した。

沖縄ナビゲーターの金城氏が沖縄の歴史を解説した

【諸会議　報告】

事業予算と具体的事業内容の検討重ねる

70周年特別委

新宗連結成70周年特別委員会（江口陽一委員長）は1月7日、2月18日のいずれも午後2時から、オンラインで第5回、第6回の委員会を開催した。

第5回委員会では、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、3月に予定していた物故者慰霊供養団派遣の延期を決定し、安全を最優先に事業を展開していくことを確認。それに合わせて、今年1月から記念事業開始としていたが、4月開始に変更すること、事業予算については協議の結果、安全かつリーズナブルな内容で事業を進めていくことを確認し、理事会に提出することを申し合わせた。

第6回委員会では、記念事業の具体的な内容について協議を行い、対談のテーマなどについて検討した。また、新型コロナウイルスにより先の見通しが立たないため、各種記念事業の日程や内容については、柔軟に対応できるように、今後検討を重ねていくことを確認した。

3月の拡大テーマ研修会開催へ向けて詳細を協議

同推協

新宗連同和推進連絡協議会（同推協、大滝晃史代表幹事）は2月3日午後2時から、オンラインで第3回定例協議会を開催した。

前回の定例幹事会で3月9日に開催することとなった、新型コロナウイルスの影響による差別を主題とする「拡大テーマ研修会」の詳細について協議を行った。研修会では「新型コロナウイルスと差別」の現状について学ぶとともに、実際に差別を受けた場合、見つけた場合の対応などについて考察するとの趣旨を確認した後、進行や当日の役割分担について調整した。講師の松村元樹氏（公益財団法人反差別・人権研究所みえ常務理事兼事務局長）からは事前に資料提供を受け、各幹事が質疑を行うこととした。

理事会へ向け令和3年度予算原案について協議

会計委

新宗連会計委員会（会計委、中村史郎委員長）は2月4日にオンラインにより、第31期第2回会計委員会を開催した。

1月19日の事業計画策定会議で検討された「令和3年度事業計画案」の説明の後、同計画案に基づき、予算案について協議。2月25日開催の理事会へ提出する予算原案を作成した。

理事会・評議員会を開催

事業方針を承認

WCRP日本委員会

世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会（植松誠理事長）は1月25日午前10時半から、東京・杉並の立正佼成会本部法輪閣で第34回理事会と第21回評議員会をオンライン併用で開催した。

理事会・評議員会の審議を経て、2021年度の事業方針・事業計画案を原案通り承認。事業方針では、第10回WCRP世界大会（2019年）の「リンダウ宣言」を基に策定されたWCRP国際ネットワークが掲げる行動計画を着実に実行するとして、以下6項目の目標を示した。①平和的で公正で包摂的な社会の促進②ジェンダー平等の推進③持続可能な環境の醸成④思想・良心・信教の自由の擁護⑤諸宗教教育の強化⑥諸宗教の連携と国際パートナーシップの発展。

また、昨年の開催が延期されていた第9回アジア宗教者平和会議（ACRP）東京大会とWCRP創設50周年記念式典の概要も示された。同大会は「行動するアジアの宗教コミュニティ：誰一人取り残さない、健やかで豊かなアジアの平和をめざして」のメーンテーマのもと、今年10月20～22日に東京・代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催する日程で、17～19日には事前会議の青年大会と女性大会が開かれる。オンラインでの開催も検討中で、3月のACRP役員会で審議、決定する。

さらにWCRP創設50周年記念式典は11月24日、京都市の国立京都国際会館で、「Our Heart for All Being―宗教協力の新たな扉」をテーマに開催する。式典は3部構成で、第2部記念シンポジウムでは、人類学者で前京都大学総長の山極壽一氏と、宇宙飛行士の山崎直子氏が基調講演を行う。

核兵器禁止条約発効で声明

全面的支持を表明 日本政府に要請も

核兵器禁止条約が発効された1月22日、WCRP日本委員会は声明を発表した。声明は同条約にあらためて全面的な支持を表明し、日本政府に対して核兵器禁止条約の署名・批准と正式な締結国になること、核兵器廃絶に向け政府が主張する「橋渡し役」に真の意味で取り組むことなど、4点について要望を明記している。

声明は「被爆者の『ふたたび被爆者をつくらない』という切実な訴えと、過去の戦争に対する宗教者の反省と平和構築に対する責務を心に刻み、WCRP国際ネットワークと共に『核兵器なき世界』を願う世界の人々と連帯し、祈りと粘り強い対話を通して全面的な核兵器廃絶に向け、力を尽くす決意を新たにします」と述べる。声明は同月26日に政府に提出された。

コロナ禍による社会問題とは

宗教や人種、差別―相次いでシンポや学習会開催

新型コロナウイルス感染症の感染拡大、それに付随して様々な社会問題が起こっている。これを受け、各地で宗教や人権、差別に関するシンポジウムや学習会などが相次いで開催された。

慈しみの実践を考える

WCRP新春学習会

世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会（植松誠理事長）は1月25日午後2時から、オンラインで「WCRP新春学習会」を開催した。テーマは「Wi thコロナを生きぬく慈しみの実践」。

基調発題では共同通信編集委員・論説委員の太田昌克氏とNPO法人ほうぼく―抱樸理事長の奥田知志氏がそれぞれ発表した。

太田氏は、1月22日に発効された核兵器禁止条約について発表。日本が同条約を批准していないことについて、「アメリカの顔色をうかがっている」と批判。日本とアメリカの同盟を「核の同盟」と表現し、アメリカが核兵器の先制不使用を検討していたことに対しても、核兵器が抑止力にならなくなるとの理由で日本が妨げとなるなど、日本が核兵器禁止に対して消極的であることを示した。

その上で太田氏は核兵器が国際的なパワーバランスを左右する状況を憂い、「非道徳極まりない兵器が国際政治の大道でいいのか」と問いかけ、核兵器禁止条約が必要であること、また日本が同条約に少なくともオブザーブ参加する必要があることを訴えた。

奥田氏はホームレス支援を行ってきた自身の経験を踏まえ、新型コロナ禍において考えてきたことについて発表。新型コロナ禍のもと自殺者が増えていると述べ、自殺防止に対して「宗教に行えることは、たくさんある」と呼びかけた。

その上で対人支援には具体的な問題を解決に導く問題解決型と、つながり続け共にいる伴走型の二つがあると説明。この二つを念頭に宗教者は活動すべきと主張し、「一緒にいる」ことも指摘した。

パネルディスカッション―各氏が発言

また、新型コロナ禍において「自助」や「自己責任」が叫ばれているが、「弱さの承認が宗教の本質の一つ」「人が生きるためには他者が必要」と指摘し、新型コロナ禍において宗教の本意が問われていると振り返った。

基調発題の後、WCRP日本委員会平和研究所所長の山崎龍明氏がモデレーターを務めパネルディスカッションを行い、日越ともいき支援会代表の吉水慈豊氏、日本キリスト教海外医療協力会タンザニア派遣ワーカー・助産師の雨宮春子氏がそれぞれ発表。吉水氏は新型コロナのために失業したベトナム人技能実習生らの支援について報告し、雨宮氏はタンザニアの劣悪な医療状況や新型コロナ禍における高齢者介護施設での体験を報告した。

質疑で奥田氏は「自助は共助や公助があるからなすことができ、社会や周りの信頼が必要。孤独は必要だが、孤立は問題」と新型コロナ禍における人々のつながりの重要性を訴えた。

不安が生む差別と攻撃

第78回「同宗連」研修会

『同和問題』にとりくむ宗教教団連帯会議（「同宗連」、足利善彰議長）は1月27日午後1時40分から、オンラインで第78回「同宗連」研修会を開催した。

開講式の後、近畿大学人権問題研究所主任の北口末広氏が「新型コロナウイルス感染症禍における差別について」をテーマに講演を行った。

北口氏は最初に、国内の新型コロナウイルス感染者への直接的な差別だけでなく、エッセンシャルワーカー（生活必須職従事者）やその家族まで差別的な言動、理不尽なクレームに苦しめられていることを指摘。感染の不安が非常に強くなった結果、不安が怒りに置き換えられ他者を攻撃する例を示し、「嫉み意識と羨望からとりわけ地方公務員への攻撃が多い」と語った。

そして経済・労働・政治・教育などすべての分野で人権問題が惹起しており、「新型コロナウイルス感染症問題が多くの社会的矛盾を浮かび上がらせた」と指摘した。また、米国における重篤者数や死者数に現れる差別に関する実態も紹介した。

続いて、感染拡大の予防対策について参考資料を提示しながら、「感染者の治療と早期発見が感染拡大を予防し、すべての人の利益になる」と訴えた。

感染者への非難や「自粛警察」行動が早期発見を遅らせるとともに、「新型コロナウイルス感染禍の不安心理はフェイク情報を拡散する」と説明。非常時の不安拡大が誤った判断を生まないために、日頃から情報収集にあたって留意すべき事項（チェックリスト）13項目を紹介し、「異なる意見に触れる、自分のバイアス（偏見）を知る、情報の真否を確認する」など、今後のネット時代を踏まえた情報リテラシー教育の必要性、特に小中学校から教育を行うことの重要性を訴えた。

引き続き、質疑応答が行われ、「現実にフェイク情報を見分けられるのか、政治関係の情報収集の在り方」などについて意見が交わされた。最後に「感染症を予防した方が得だと思える方策を考えるべき」と結んだ。

北口末広氏が講演

感染者への偏見抑制を

日弁連 人権イベント・シンポジウム

日本弁護士連合会（日弁連、荒中会長）は2月15日午後1時から、オンラインで人権イベント・シンポジウム「新型コロナウイルスと人権～差別・偏見のない社会を目指して～」を開催した。

荒中会長の開会あいさつに続き、北村聡子弁護士が「COVID-19と人権に関する日弁連の取組―中間報告書」について、関哉直人弁護士が「新型コロナウイルスと偏見・差別・プライバシー侵害ホットライン」についてそれぞれ報告。コロナ禍における日弁連の人権擁護活動を解説した。

続いてパネリスト3氏が報告を行った。感染症疫学、ウイルス学を専門とする押谷仁東北大学大学院教授は、発症前の感染性や軽症・無症候者の存在等、新型コロナウイルスの疫学的特徴と感染制御の難点について解説した。その上で、集団の中で感染者が発生した時、集団全体をリスクと捉える勘違いにより差別偏見が生まれている現状を述べ、ウイルスは目に見えないため、厳密に調べれば感染性を有していない存在をも過剰に恐れている問題点があることを指摘した。一人ひとりがウイルスの特徴をよく理解し、リスクに則した対応をすることにより差別や偏見の抑制につながることを訴えた。

社会心理学を専門とする三浦麻子大阪大学教授は、昨年1月末から約1年実施した人心変化と差異を観察した調査結果を基に、危機意識や予防行動等、新型コロナウイルス流行への関心がインフルエンザ流行や東日本大震災に伴う原発事故に比べても高く、昨年3月以降高い状態が続いていることを解説した。

さらに、他者に対する心理に関する調査結果を分析し、「感染者は不快というより怖い存在と捉えられている。感染を避けたいという感情を否定すべきではなく、否定すべきは非合理な対応」と述べるとともに、論理的に正しくてもそれを酌んで理性的に行動しない人間の心の仕組みがあることについても解説した。

国際人権法等を専門とする坂元茂樹神戸大学名誉教授は、新型コロナ禍の日本における差別の特徴として「顕著な同調圧力」と「可視化された存在への恐れから発展する脅威、排除、非難、攻撃＝自粛警察」があることを指摘。

「同調圧力は各種要請への対応力等、海外に比べプラスに働いた面もあるが、ウイルスではなく、同調圧力による排除により奪われる命があってはならない」と訴えた。ハンセン病の歴史、反省から法律が作り出した社会的差別や病気に対する誤った認識等を学ぶことの重要性を説き、「ウイルスを正しく恐れ、感染者を恐れてはならない」と述べ、人権に基づくアプローチの重要性を強調した。

この後、日弁連で実施したホットラインの相談事例を基にパネルディスカッションを行い、人権を擁護し、不当な差別や偏見をどのように抑制していくかを探った。

韓国における宗教の明暗

―IPCR「国際セミナー2020」

3カ国で開催、写真は韓国会場

韓国の平和活動法人・韓国宗教平和国際事業団（IPCR）の主催による「国際セミナー2020」が1月27日午後2時半から、オンラインで開催された。同セミナーは「東北アジア平和共同体構築のための課題」を総合テーマに、2009（平成21）年から毎年開催され、韓国宗教人平和会議（KCRP）とWCRP日本委員会、中国宗教者和平委員会（CCRP）の宗教者らが参加している。

今回のセミナーはセッション1「宗教文化に跨（またが）る対話―アジア文明共同体を作り上げる」、セッション2「パンデミックの時代、宗教の二つの顔」、セッション3「新型コロナウイルス禍の中の人間と宗教者のあり方」が行われ、日中韓の宗教者による基調講演とパネルディスカッションが行われた。

セッション2では、韓国のセギル基督社会文化院院長のジョン・ギョンイル氏が講演。宗教の「暗い顔」として、韓国のプロテスタント教会が集会を強行したことによりクラスター（感染者集団）が発生、世論の批判が集中した経緯を説明した。

また、カトリックや仏教など他の宗教も人々の期待に答える存在にはなり得なかったとして、「宗教に対する社会的な期待が一番低くなった時代」と分析した。

一方、「明るい顔」としてパンデミックにおける精神的な危機に対して、宗教は「心理的・霊的なワクチン」としての役割があると示し、「社会的災難において弱者を救済し他者のための存在となれるならば、再び信頼され愛されるようになるだろう」と提起した。

この後のパネルディスカッションの中で、韓国の監理教神学大学准教授のパク・チャンヒョン氏は、宗教が人々からの信頼を得ようとするあまり、人間本位の方向に進んでしまうことへの危険性を指摘。人間中心の文化と資本主義が現在のパンデミックを生んだとする声もあるとし、「繁栄だけを追い求めて全速力で直進する機関車のような世の文化に、宗教が制御装置の役割を果たすべきではないか」と提言した。

セッション3では、WCRP日本委員会・平和研究所所長で武蔵野大学名誉教授の山崎龍明氏が講演した。

立教70年祭を厳修

信心の深化を、新たな気持ちで出発

大阪・大聖堂

妙道会教団

妙道会教団（佐原慶治会長）は2月4日午前10時半から、大阪市天王寺区の大聖堂で「立教70年祭」を厳修した。

新型コロナウイルス感染症対策として、一般参列は行わず、新教会役員、新導師代表者のみが参列。一般会員向けに、動画共有サイト（YouTube）で中継し放送した。

祭文を奏上する佐原会長

祭典は修祓が行われた後、導師入場。佐原慶治会長が登壇し、献香に続いて祭文が奏上された。立教の原点、「両聖師さま」と仰ぐ教団を開創した佐原忠次郎師と佐原俊江初代会長、先達導師の足跡に思いを馳せ、立教70年を寿ぐ読経。この後、導師位授与、教会役員委嘱の儀を行い、それぞれに佐原会長から贈位書と委嘱状が手渡された。

続いて、立教からこれまでの足跡や、昨年の新型コロナ禍からの新たな取り組みなどを振り返った映画「立教70周年―未来へ、大法をつなぐ」を上映した。

次いで佐原会長が「ご教示」に立ち、教団の使命である聖地・大宝塔涌出にむけての両聖師の歩みに触れた後、「見えざるものに対するより深い思い、法華経への厚い帰依心を持てば、必ず妙不可思議な功徳をいただけます」と信心の深化を促し、立教70年の節目に新たな気持ちで出発することを呼び掛けた。

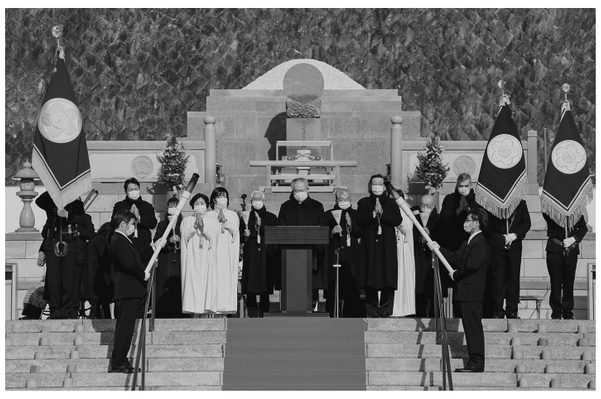
聖訓・三大誓願を奉唱して「ご法殿」が閉扉、会歌斉唱をもって閉式した。

深田教主「御親教」「愉快の苦しみ」を説く

第97回教祖祭 感謝の誠を捧げる

円応教

円応教（深田充啓教主）は1月6日、兵庫県丹波市本部聖地で深田千代子教祖（慈照院圓應智覺大姉）を偲ぶ「第97回教祖祭」を執り行った。


陽光の中、「御親教」を述べる深田教主

新型コロナウイルス感染症対策のため、開催時間と内容を変更し、教祖が昇天した午前5時に御墓所内庭にて、深田充啓教主と教主家族、教団役員らで「おつとめ」を行った。

午前10時半から御墓所で、深田教主を祭主に「墓前式典」を執り行った。例年の午前4時過ぎからの式典と異なり、今回は参列者が明るい日差しのもと、教祖を偲び、感謝の誠を捧げた。

午後1時から本殿にて、「祥月式典」を行った。献上の儀の後、「おつとめ」。新型コロナウイルス感染症防止対策のため、導師以外の参列者は黙唱で行った。続いて中村史郎理事長が新年のあいさつを行った。

深田教主が「御親教」を行い、教典の310項「何事も善き悪き判じる行いをなして皆様心楽しく仲良く愉快の苦しみ働きなして下されますよう」を引き、式典は教祖昇天の時間に開催するのが本意だが、信者の安心、安全を考え時間を遅らせたとして、「時と場合、状況や人に合わせて、できるだけ多くの人が参拝しやすい状況を作り出していくことが一番、大事」と説いた。

また、人生は苦しみを経て喜びを知ることができ、信仰は道理を知り自らの間違いを教えられ懺悔し悔い改めていく中に喜びがある、そして心広く大きく悟れた時、「愉快の苦しみ」となることを解説。教祖は「そういう苦しみを乗り越えて、そして愉快な楽しい仲間をつくっていきなさいよ」と説いているとした。

深田教主は「コロナを通じて御教祖様は、私たちに何を学ばせ、何を悟らせようとしているのでしょうか。今の苦しみも先の楽しみとなるように、十分に研究していくことが『愉快の苦しみ』とつながっていくと思うのです」と呼びかけた。

大日如来様の慈悲に感謝

第43回御昇天奉祝大祭

光妙教会

大法輪台意光妙教会（星野政和会長）は1月13日から15日まで、福岡県太宰府市の本部で「第43回御昇天奉祝大祭」を執り行った。

初日13日の式典は午前10時半に開式。「たらちねのお慈悲様」斉唱の後、大祭委員長の星野政和会長があいさつを述べ、「きびしい〝コロナ禍〟のなかも、大日如来様の慈悲にお守りいただき、新しい年の出発を迎えることができました」として、「私たちは今後さらに慈悲に沿い、より深く〝こころ〟を浄化し、〝いのち〟を正し、ウイルスという目に見えぬ淘汰の波も、自然災害などの目に見える淘汰の波も、しなやかに乗り越えてゆかねばなりません」と説いた。

焼香、開扉に続き、龍誓奏楽と地搗き歌囃を奉納。「生命の威光様おでまし」に移り、「生命の威光様」（聖水）を厳かに迎え入れた後、正面の御法座の赤白の幕が開き、「大日如来様おんみたま様」（座像）が姿を表わすと、参列者の「なむあみだぶつ」の唱名が堂内に響き渡った。「感恩詞奏上」に続き、「大日如来様」の「御真言」（録音）が流された。御法座の幕が閉じられ「大日如来様」退座の後、星野会長が登壇し「しんりのひらき」を述べた。

この後、江口家親族と信徒の順で「生命の威光様」拝受が行われた。

15日まで会員、信者の参拝が続き、13・14日の二夜には奉納演芸が催され、「大日如来様」の慈悲に生かされている喜びと感謝、帰依の思いなどが表された。

3日間にわたり熱心な参拝が続いた

〝仏性の種〟から華を咲かせる

開教83周年記念式典

思親会

思親会（飯島法道会長）は2月11日午前11時から、神奈川県伊勢原市の思親大宮殿・大孝堂で「開教83周年式典」を厳修した。

飯島会長を大導師に「ご供養」

新型コロナウイルス感染対策を講じたなか開式した第1部は、御旗が奉掲された棲神壇前に大導師の飯島法道会長と式員が入場し、着座。参列者一同で「ご供養」を厳修した。

正午過ぎからの第2部では、会員綱領の唱和、来賓紹介、祝電披露の後、会員代表法話が行われた。

この後、飯島会長が登壇し、「御親教」を行った。はじめに「83年前、開祖さまは〝法華三部経を師〟とされ、純粋できれいな心による浄行を行う思親会を開教されました。私たちは開祖さまの素顔、また天から思親会に与えられた役目を自覚することが大切です」と式典の意義を述べた。

そして開祖が説いた〝法華経は懺悔（さんげ）の経〟とその根本を説いたこと、法華経には仏のすべての覚り、智恵や神力の教えが詰まっており、宇宙の法則、真理が説かれていること、さらに「諸行無常、諸法無我」「一切皆苦」について解説した。

また、法華経には第一にすべてのいのちの尊さ、第二に最尊最上の教えである法華経とこの世で出会えたことの尊さが説かれているとして、「その喜びを実践行として行うこと、霊界と共に自分の心も清めることを意識していくことが大切です」と述べた。

飯島会長は古代蓮とも言われる「大賀蓮（おおがはす）」を紹介し、千葉県の遺跡から2千年前の蓮の種（たね）が三粒みつかり、その中の一粒は「蓮博士」と呼ばれる大賀一郎氏の手により2千年の時を越え発芽し、大輪の華を咲かせた（1951年）ことを解説。「私たちすべての人の心の中に〝仏性という種〟があることを気付き、その仏性の種から美しい華を咲かせることが、私たち思親会員に与えられた尊いお役なのです」と説いた。

節分行事

運勢占い付き・厄除の豆配布

福聚の会

福聚の会（杉浦妙周会長）は1月31日午前10時半からと午後1時半からの2部に分けて、愛知県知立市の本部・大乗山法隆寺で「令和3年節分会」を執り行った。

杉浦会長による厄払い「ご祈祷」

節分会は杉浦妙周会長を導師に読経供養の後、祈祷者に向かって厄払いの「ご祈祷」を行った。今年は新型コロナウイルス感染防止のため、恒例の豆まきは行わず、参拝者一人ひとりに「運勢占い付・厄除のお豆」を配布した。

また、境内では小学4年生以下の子どもたちの度胸試しとして、教団役員が扮した恐ろしい鬼から豆をもらうことができた子どもは福聚の会キャラクターの「フッキー」からお菓子を受け取れるという催しが持たれた。

例年とは異なる式次第、趣向の節分会とはなったが、季節の節目の大切な行事を無事執り行った。

無病息災、厄払い祈願

幸運を授かる抽選会は実施

大和教

大和教（保積敬子教祖）は2月3日の午前11時過ぎから、宮城県塩釜市の本廳で「節分祭」を執り行った。今回は新型コロナウイルス感染症対策のため、役員と信徒会、奉仕者のみが参列、豆まきは中止という式次第で行われた。

保積教祖が「お大黒様」を授与

太鼓の合図により開式。斎主の保積敬子教祖と斎員が神殿に入場し、斎主一拝の礼、修祓が行われ、斎主が「節分祭祝詞」を奏上、厄除けと除災招福を祈願した。斎主と参列者による玉串奉奠、斎主一拝の礼で神事を終了した。

この後、毎年恒例の幸運が授かる抽選会が行われ、保積教祖から当選者一人ひとりに「お大黒様」はじめ米やお神酒などが授与された。

崇高な精神に感謝し進む

太陽精神碑建立記念祭

解脱会

解脱会（本部＝東京・四谷、岡野英祥法主）は2月11日午前10時から、埼玉県北本市の御霊地で「第82回太陽精神碑建立記念祭」を開催、全国会員代表者が参集した。

奉告祭で岡野理事長が太陽精神碑に向かい、「奉告文」を奏上した

太陽精神碑は1940（昭和15）年2月11日、岡野聖憲会祖（解脱金剛尊者）が地上の万物を平等に育み、与えて求めぬ太陽の心、無私大愛の精神を表象する碑として建立。解脱会では毎年、建国記念の日に式典を開催している。

式典に先立ち、午前8時45分より岡野英夫理事長はじめ本部役員らが祭典の無事を祈る「奉告祭」を執り行い、岡野理事長が「奉告文」を奏上した。午前9時からは青年部が会場の3カ所に設置された検温所にて参加者の検温、手指の消毒、マスクの確認、パンフレット配布を行うなどの新型コロナウイルス対策がなされた。

午前10時、岡野会祖が「祖先の汗と涙と肉と骨との結晶」と示した「米」「麦」「豆」「粟」「蜀黍」が供えられた太陽精神碑前で、第1部「太陽精神碑前之儀」が開式。今回は新型コロナウイルスを考慮して、理事参与以上の役員のみが参列した。

続いて午前11時15分から第2部「太陽精神碑建立記念祭式典」が開式。国歌と太陽精神碑の歌を斉唱、解脱金剛尊者の「み声」（録音）拝聴に続き、岡野理事長が国旗に向かい誓願文を奏上した。

式辞の中で岡野理事長は「国難とも言うべき今、金剛さまの御弟子として、太陽民族の子孫としてその崇高なる精神に感謝し、その事を日夜忘れずに務め、新しい時代を迎えるにあたり、社会の立て直しに泰然の覚悟で進んで参りましょう」と呼びかけた。

この後、服部宇之輔常任理事の発声で万歳三唱し、終了となった。

祭典は東京ブロック青年部OB協力のもと、インターネットを通じて全国にライブ配信された。その中では参加者のインタビューも行われ、コロナ禍にあって参加した喜びの声や、記念祭のお祝いメッセージなどが伝えられた。

青年部員や信者らが祝福

成人之儀を執行

霊波之光

霊波之光（波瀬敬詞教主）は1月11日午前11時から、千葉県野田市の本部・礼拝堂で「成人之儀」を執り行った。例年は聖神殿で行っているが、今回は礼拝堂を会場に成人式関係者のみに限定し、換気や間隔を空けての着座など、新型コロナウイルス感染対策を施した中での開催となった。

午前11時、太鼓の二連打が響き渡り、波瀬敬詞教主が御神域の天使閣大神之御座に昇殿し「御祈り」を捧げた。礼拝堂の成人者は合掌し、これを拝した。

この後、波瀬教主は天使閣最上階に姿を表し笑顔で手を振り、その姿が礼拝堂や各所の大型画面に映し出されると大きな拍手が沸き起こった。礼拝堂での式典は、成人者代表が御神像前で「成人の祈り」を読み上げ終了した。成人者は青年部員や信者らが作る花道を、祝福の拍手を受けながら退堂した。

この後、成人者は東御礼御下賜所で、波瀬善雄初代教主（御守護神様）直筆の「聖心（せいしん）」の色紙と「成人の祈り」を賜り、天使閣に向かい手を合わせ、感謝を捧げた。また包札所で青年部員からカーネーションが渡され、それぞれ家族の元に向かった。

当日は晴天に恵まれ、成人者は参門前広場や、天使閣と霊波門の精巧な模型を配した記念撮影スポットで写真に収まった。また、御由来館や新装なった宝物殿で、家族と共に拝観する成人者の姿も見受けられた。

なお、式典後の「成人の集い」は感染防止のため催されなかった。

霊符と浄めの「ご神酒」を授ける

真生会

田中会長から「お祓い」を受ける

真生会（田中庸仁会長）は2月7日午前10時から、岐阜市彦坂の総本山真生寺で「厄除け節分祭」を執り行った。

本堂での田中庸仁会長による魔除けの「切り火ご神事」から始まり、企業・団体の事業繁栄、無事安全の祈祷と共に、祈祷者全員の氏名が読み上げられ、一年間の無病息災、身体健全の祈りが捧げられた後、一人ひとりが「お祓い」を受け、霊符と浄めの「ご神酒」が授けられた。

田中会長が「ご真教法話」に立ち、六白金星の今年の運勢と心構えが説かれた。

今回は新型コロナウイルス感染症対策から、例年の特設ステージからの福豆まきは残念ながら催すことができなかった。

「法燈継承」から30年

書き初めに込めた願い

令和3年「御親教」式典

立正佼成会

立正佼成会（庭野日鑛会長）は1月7日午前9時から、東京・杉並の本部大聖堂で「令和3年次『御親教』式典」を挙行した。式典は、新年にあたり庭野日鑛会長が、会員に今年1年の心構えを示すもの。今回は新型コロナウイルス感染症対策のため、式次第を短縮し、大聖堂に会員を参集させず、YouTubeでの映像配信（会員限定）を行った。

式典は聖壇に庭野会長の書き初め「燈明」「省心」の二幅の書を掲げた中、開式の辞とお題目三唱、会歌の斉唱の唱和、国家・会歌の斉唱の後、庭野光祥次代会長を導師に読経供養を行った。

この後、國富敬二理事長が「年頭あいさつ」を述べ、「新型コロナウイルスの感染拡大がきっかけとなり、大きな転換点のチャンスを頂いた」と説明。人が集う道場での活動が困難な中、「道場参拝型」を中心とした布教から、教団の原点である「万人布教者型」「入会者即布教者型」へと転換し、「人の心に寄り添うことを大事にして、皆様と心一つに前に進んでまいりたい」と述べた。

二幅の書き初めを掲げた中「御親教」を行う庭野会長

そして自身が毎日続けている、縁ある人達に電話をかける〝思いやりコール〟について報告。相手とのやりとりを通して気付きや学び、内省の機縁になっていることを話した。

続いて齋木淑江関東教区長（横浜教会長）が「決意の言葉」を述べ、主任時代に教会長の言葉により自身の信仰観が一変した体験を振り返った。そして現在のコロナ禍の中での教会活動や、家庭での教えの実践に努めていることなどを発表した。

庭野会長が登壇し、「御親教」。冒頭、元旦に大聖堂の屋上から初日の出を拝むことができ、自然や仏の「おかげ」を感じることができた感慨を述べた。

続いて「令和三年次の方針」について言及し、家庭を斉（ととの）えること、創造的に真剣に努めることを掲げたことを説明。今年は会長に就任した「法燈継承」から30年にあたり、書き初めも30回目になったことを述べ、揮毫した「燈明」「省心」の書に込めた願いを説いた。

「燈明」は10年を一区切りとして継続してきたもので、今年新たに揮毫した「省心」とは心を省みることであり、コロナ禍の中、特に自分の心を省みて、今後の生き方を考えることが大事と述べた。

また、「帰省」という言葉の本来の意味は「故郷に帰り父母の安否を問うこと」にあり、「省」には、省みる、無駄を省き、本当にしなければならないことに力を入れるという意味があることを説いた。

さらに修行することと悟りは一つであることを示す道元禅師の言葉「修証一等」を解説。修行することがそのまま悟りであり、「在家仏教では日常生活が修行であり、人の喜ぶことを行う時、すでに慈悲、仏の心になっています」と述べた。

悟りを開いた人はそこで終わりではなく、ますます精進せずにはいられなくなるとして、「即是道場、在家仏教としての私たちの修行は尽きることがありません。生きる限りは精進させていただき、仏さまの慈悲の心を頂戴することができるのです」と説いた。

第7回西原由記子記念事業講演会

自己否定感と向き合うには

東京自殺防止センター

東京自殺防止センター（吉岡尚文理事長）は第7回西原由記子記念事業講演会を2月11日午後2時から、オンラインで「自己否定感と向き合う…不登校・ひきこもりを経験して生きていく」をテーマに開催した。同講演会は東京自殺防止センター創設者の故西原由記子氏を顕彰する記念事業の一環。東京都の地域自殺対策強化補助事業として行われた。

講師は教育社会学者でTDU・零穿（ゼロウガ）大学代表の朝倉景樹氏。零穿大学は自分とは何者か、いかに生きるかを知る・表現することを通して模索する学びの場で、主に不登校・引きこもりを経験した若者の学びに寄り添い、自ら始める研究、表現活動をサポートしている。

講演会では冒頭、東京自殺防止センターの東内祐宏副理事長が開会あいさつ、同センターの活動を紹介した。

この後、講演に移り、朝倉氏は「不登校から経験する〝苦しさ〟調査」（2019年実施）を引き、「人が当たり前にできることができない」が66・9%と最も多く、その「苦しさ」の内容は「自分が社会から外れている」「自分は生きることに向いていない」「自分には将来があると思えない」など、「自分はダメで、弱く、人が、社会が怖いと考えている」と分析した。

不登校・ひきこもりの経験者へサポートを行っている朝倉氏が講演

朝倉氏は不登校の定義から、小中学校の不登校人数は18万1272人（2019年度）と増加している現状、不登校を生む日本の教育制度と社会意識の問題などを解説。その上で多くの若者たちが感じているのは、豊かな社会で豊富な商品と選択肢があることによって「自己責任」が問われ、巨大で強靭な社会の仕組みに「無力感」を抱き、そこから「自己否定感」「被害者意識」が生じているという。

そのため若者たちは空気を読んで主流のメッセージを取り込み進むしかないと感じ、時間だけが進んでいく。こうした自己否定感を解きほぐすには、「自分を考える時間を持ち、自分自身であることを取り戻す、自分と社会のつながり方を見つける、自分の生き方を見つけ実践することが大切だ」と朝倉氏は述べた。

質疑応答では、親戚として引きこもりの家族にどのようにアプローチしたらよいかなどの質問が続いた。

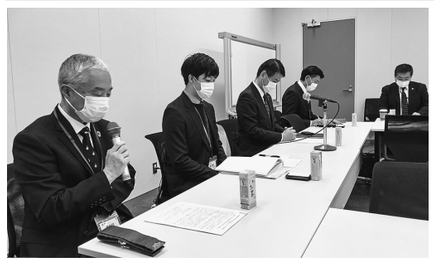
「宗教×SDGs」事前学習会

脱炭素政策を学ぶ

日本宗教連盟

日本宗教連盟（日宗連、戸松義晴理事長）は1月13日午後4時から、東京・永田町の衆議院第一議員会館で、宗教法人の公益性に関するセミナーのシリーズ「宗教×SDGs」開催へ向け、第2回事前学習会を開催した。

シリーズ「宗教×SDGs」は、宗教文化や宗教に根差した活動の観点から、SDGsを親しみやすく読み解いていく――との日宗連主催によるセミナーの新シリーズ。昨年3月に「ころのユニバーサルデザイン」をテーマに第1回セミナーを開催する予定だったが、コロナ禍により延期となっていた。事前学習会は昨年12月21日、第1回を開催している。


学習会では日宗連の協賛団体から、それぞれのSDGsに関する報告も行われた

今回の事前学習会は、はじめに経済産業省カーボンニュートラル実行計画推進室課長補佐の奈良篤人氏が政府の政策について講演した。

昨年10月、菅義偉首相が温室効果ガスを全体としてゼロとするカーボンニュートラル、脱炭素社会の実現を宣言。これを受け、12月には経済産業省が中心となり各省庁と連携し「2050年カーボンニュートラルに伴うグリーン成長戦略」を策定した。奈良氏は、同成長戦略が経済と環境を好循環につなげるための産業政策であるとして、予算や税制、金融など5項目の主要政策について解説した。

この後、日宗連の協賛団体である教派神道連合会と全日本仏教会、日本キリスト教連合会、神社本庁、新日本宗教団体連合会（新宗連）からSDGsに関する報告が行われた。

宗教施設の太陽光発電設置や節電・節水・ゴミの削減、植樹活動など主に環境保全に関するさまざまな取り組みが示され、立正佼成会の「環境マネジメントシステム」による、本部施設の電気・ガスの使用量並びに一般廃棄物（ゴミ）の削減例も報告された。

明るい社会づくり運動提唱50周年　記念誌を発刊

人や地域を大切にする仲間づくり

この度『明るい社会づくり運動提唱50周年記念誌』が特定非営利活動法人・明るい社会づくり運動から発刊された。

「明るい社会づくり運動」（明社）は1969（昭和44）年に立正佼成会の当時会長であった庭野日敬師が提唱したことに始まる。当時は高度経済成長期で経済的、物質的に豊かになる一方で「自己中心」の考え方がはびこり、心が荒廃していくと庭野師は捉え、心の豊かさを求めることが必要だと考えていた。庭野師は運動を提唱した理由を、次のように語っている。

「先ず人と人との間の不信感をなくし、信頼と友情を回復することが大切であります。不信感が根底となって親子の断絶、人と人、国と国との争いがおこっている。それには、自分のエゴイズムを捨て、相手を信じ仰ぐという信仰を基盤とした、人間尊重の精神が必要です。人と人との心の信頼と友情の灯をともしていく、そこに明るい社会づくりの目標があります」

その後、日本全国で展開した明社は「明るい社会の実現に向け、各地域で多様な奉仕活動、社会活動、平和活動、災害支援活動などを実践する運動」として、地域に根差した活動を行ってきた。

これまで、多くの人々がこの理念に賛同し、前田義徳・元NHK会長、井深大・元ソニー名誉会長、福田赳夫・元内閣総理大臣、石原慎太郎・元東京都知事らが会長を務めるなど、多くの著名人も参加してきた。

記念誌には2019（平成31）年4月27日に東京都港区で開催された「明るい社会づくり運動提唱50周年記念大会」の報告が載せられている。その中で協力団体としてあいさつを行った立正佼成会会長の庭野日鑛氏は、1977（昭和52）年に開催された第1回大会で発表されたエピソードを紹介し、明社による地域清掃が町の環境美化だけでなく、「それを続ける人たち自体がタバコや紙くずを街頭に捨てなくなった、いや捨てられなくなった」という「自分自身を高める」効果を生んだことを話し、「このことが『明るい社会づくり運動』の重要な特徴の一つ」と述べている。

2019年4月に開催された50周年記念大会

明社は同大会で発表した「大会宣言文」で「人間としての基本的な価値である『思いやりの心』を大事にしていくこと、そして「あったかい」「ほっとけない」「ゆずりあい」「ささえあい」「まもりたい」と感じることが「日常的に当たり前になる」社会づくりを目指す―と謳っている。また、50周年を迎えた明社はその一番の成果として「人や地域を大切にする仲間が増えたこと」を挙げており、人の絆を大切にしていくことをあらためて宣言している。

記念誌にはこの他にも元会長や理事長らのメッセージ、50年の年表が収録され、歩みを振り返るとともに、今後の活動への方針や提言が示されている。同記念誌に関する問い合わせは、明るい社会づくり運動事務局（Email:info@meisha.jp、電話03―5962―3527）まで。

現代社会と宗教 ④

バーチャル世界の可能性

今井　信治（立教大学兼任講師）

2020（令和2）年末にアニメ映画『鬼滅の刃』が歴代興行収入1位になったことは記憶に新しい。「高い山を支えるには広い裾野が必要」と言われるように、日本にはアニメやマンガ文化を支える広い裾野が存在する。

その裾野を象徴するイベントが、世界最大級の規模を誇る同人誌即売会コミックマーケットである。同イベントにはアニメ・マンガ・ゲームを中心とした様々なジャンルのオタクが集まり、自作の同人誌の頒布やコスプレなどが行われる。1975（昭和50）年の初開催以来、平均して年2回ほど開催され、順調に規模を拡大してきた（図1）。2019（令和元）年までに97回を数え、同回で来場者75万人という記録を打ち立て、オタクにとっては年中行事の様相を呈している。

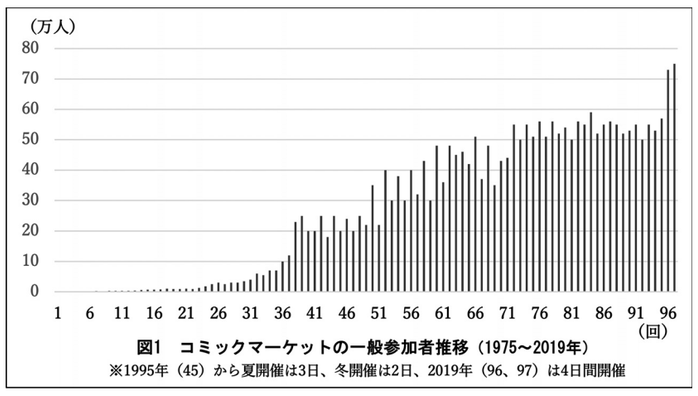


図1　コミックマーケットの一般参加者推移（1975～2019年）
※1995年（45）から夏開催は3日、冬開催は2日、2019年（96、97）は4日間開催

コミックマーケットの規模は参加者数から十分に伝わるかと思う。ただしここで注目すべきはその規模ではなく、①コミックマーケットが準備会によって「ハレの日」、つまり日常とは異なる特別な日と規定されていること、②営利活動と一線を画していること、③イベントに関わる人々がプロモーターと消費者という二項対立で捉えられることなく、全員が「参加者」であることである。

オタクの「祭り」としてのコミックマーケット

前回（第1127号、2021年1月1日付）はハロウィンやスポーツW杯を例にして、イベント時のみ現れる「一瞬の共同体」について論じた。

そのイベントは一時的な縁を結ぶものであるが、結ばれた縁はイベントが終わると即座に雲散霧消してしまう。そこには非日常があっても、非日常を支える日常が抜け落ちている。この非日常と日常との相補関係は宗教生活にも欠かせない要素である。村落共同体あるいは宗教の信者が、祭りの時だけその構成員になるわけでないことに鑑みれば、ご理解いただけるだろう。

対してコミックマーケットに参加する者は、日常においてもアニメやマンガに耽溺（たんでき）している。とりわけ出展する者は開催日に合わせて日常の限られた時間を創作に費やしている。ハロウィンのように当日だけの仮装ではなく、常日頃からコミックマーケットを強く意識した生活を送るのである。

また、準備会も出展者もほとんど利益が出ていない。特に出展者はその6割が赤字である。コミックマーケットは多くの設営ボランティアによって器が整えられており、参加者は、時に運営者、時に出展者、時に購買者と姿を変える。近現代的な都市イベントとは異なり、参加者が一体となって「祭り」を盛り上げているのである。

そんな営利のない活動に参加するのはオタクだからであり、参加したら周りはオタクだらけで、自らもまたオタクであると再認識する。祭りが参加者に共同体への所属意識をもたらすならば、コミックマーケットはまさしく「オタクの祭典」であろう。

バーチャル世界が現実の一部となる

そんなコミックマーケットも、昨年はコロナ禍により開催が見送られた。「三密」回避を命題とするウィズ・コロナに鑑みれば仕方のないことであろう。

そこで注目したいのは、株式会社HIKKYが主催するバーチャルマーケットである。昨年末から今年初頭に掛けて開催されたバーチャルマーケット5は、実に73の企業やアーティスト、そして一般サークル100以上の規模を持った展示即売会であり、23日間で延べ100万人を超える入場者を記録した。

同イベントは、バーチャル世界である「パラリアルワールド（平行現実世界）」で自らのアバター（分身）を操り交流することを目的としている。そこではイベントのために作られた世界を皆で闊歩し、展示物の鑑賞やショップでの購入ができる。バーチャル世界であっても、そこでは非日常的な空間が提供されているのである。

コロナ禍においては、若者を中心にしてNintendo Switchの『あつまれ　どうぶつの森』の世界的なヒットや各種SNSの伸長があり、各種業務ではインターネット上で繋がる「場所」の必要性が表面化した。アフター・コロナ、そしてニューノーマルを考える上で現実の世界のみを特権視することができないことは明白だろう。

バーチャル世界はもはや偽物の世界ではない。バーチャルは「仮想」と訳されるのが常であるが、辞書的には「実質的な」何かを指す。その原義に従い、バーチャル世界は実質的な効力を持って我々に訴えかける現実の一部であることを認める必要がある。

コロナ禍で祭りが催行できない、信者が集まることができないと嘆く向きもあるかと思う。しかし、嘆くばかりではなく、我々はニューノーマルを見据えた環境作りに向き合わねばならないだろう。オタク界隈は、その萌芽をみせている。

新刊紹介

自分の薬をつくる
坂口　恭平　著

昨年7月以降、自殺者は、一昨年の数を5カ月連続で上回っており、10月は率にして前年同月を39・9%、11月は11・3%上回り、自殺者の増加傾向が続いている。

著者は、自身が躁うつ病であることを公言して、自分の携帯番号を公開し2012（平成24）年から希死念慮に苦しむ人からの電話を受けて会話する「いのっちの電話」を始めて、これまで2万人以上の悩みを聞いてきた。

本書は、2019年に実際に行われた「自分の薬をつくる」ワークショップをもとに、「いのっちの電話」を紙上体験できる内容。

ワークショップ会場を病院に見立てて、坂口氏が医者で参加者24人は患者役となり、ホワイトボードを隔てて診察室と待合室に分かれ、それぞれの悩みを聞いて処方箋を書いていく。

冒頭で著者自身が体験を語りつつ、テーマの「自分の薬をつくる」を「薬」と「つくる」について解題する。ワークショップに参加した24人のうち22人との会話と、坂口氏が出した処方箋が会話体でまとめられている。

昨年末の新型コロナウイルスの感染拡大状況を受けて書き下ろした「非日常につける薬」では、「年間2万人以上が自殺で亡くなる」これまでの状況こそ危機的状況だ」と訴えると同時に、コロナ禍での自粛がもたらす窮屈さからの一時的な避難を説く。

様々な人の悩みを聞くことで、自分だけが悩んでいるのではないと気付き、心は落着いていく―。悩める現代人への処方箋の作り方がよく分かる一冊。（晶文社、A5判、572頁、7150円）

揺らぐいのち
―生老病死の現場に寄り添う聖たち
北村　敏泰　著

著者は元読売新聞編集局部長などを務めたジャーナリスト。本書は、著者が長年にわたり報道を続けている現代社会における「いのち」の諸問題について、各現場で取材した内容をまとめたもの。

本書の内容は、出生前診断・代理出産、精子卵子提供をはじめとする生殖医療や中絶など、乳児遺棄を防ぐ取り組み、子育て支援や虐待問題、被虐待児養護施設や里親の実際、いのちの教育、またホスピスなど終末期医療の施設での状況、そしてすべての人が必ず迎える死への向き合いと葬送の在り方など。

いわば人間の一生に関わる「生まれる前」から「死んだ後」までの「いのち」をめぐる諸問題について、医療や福祉、教育という社会の現場で起きていることを詳しく報告し、信念をもってそれに向き合う人々の姿勢をインタビューしている。

サブタイトルにある「聖（ひじり）」とは、元来はかつて各地を遊行しながら人々に寄り添い、困っている人に救いの手を差し伸べた仏教者のこと。取材で出会ったいのちの現場の人々、宗教者や医療者、福祉・教育関係者たちはまるで「聖」のように実際の行いで人々の苦に向き合っているという。

本書の内容は、宗教専門紙『中外日報』に2017（平成29）年5月から翌年8月まで「生老病死――いのちの現場から」として、100回にわたり連載したものを基にしている。この連載が出版社の編集者の目に留まり、「これは宗教者だけでなく広く一般社会に問うべき重い内容だ」との判断から出版が決まったという。著者は、連載の内容を一般の人々にも訴えかけるように加筆修正を行った。

本書は、宗教を勧めたり持ち上げたりしているのではなく、揺らぐいのちの現場の問題点を見据え、「いのち」という人間すべてが真摯に向き合うべき問題に向き合っている宗教者や医療、福祉、教育関係者の姿勢を通じて考えるという、読み応えのある問題提起のルポとなっている。（晃洋書房、四六判、224頁、2420円）

人類の共生と平和の尊びを求めて
―寛容に生きるスリランカ宗教の超克思想を考える
釈　悟震　著

本書は、中村元東方研究所理事で東方学院講師を務め、インド仏教学と東アジア仏教を専門とする著者による、寛容や共生、平和を包含するスリランカ仏教の超克思想に関する研究書である。

本書の中心をなしているのは1873（明治6）年、スリランカ西海岸で二日間にわたり行われたキリスト教宣教師と牧師、同国の仏教僧との「キリスト教か仏教か」を巡る対論にある。一万人の聴衆を前にした対論で、結果は仏教側の勝利に終わったと言われている。対論はスリランカの人々に仏教徒としての自覚と誇りを呼び起こしたばかりでなく、インド哲学者として知られる中村元によると「一つの大きな世界思想史的な動きの波動」（中村元選集『現代インドの思想』第32巻）であったという。

対論の詳細については本書に詳しいが、中村に師事していた著者は、この対論に今日の世界が直面する憎しみの連鎖を断ち、宗教間対話を通じた共生思想構築の可能性をみる。

本書では、日本の戦後賠償を寛容と慈悲の精神で放棄したスリランカのジャヤワルデネ大統領の思想や、仏教精神に基づいた農村開発運動「サルボーダヤ運動」における今日的多元主義と寛容思想などについても考究する。

本書は文部科学省・平成29年度科学研究助成事業による研究プロジェクトで、受け入れ研究機関は中村元東方研究所／東方学院、研究代表者は著者。研究の根底には、著者がライフワークとする研究テーマ「人類の共生と平和の尊び」がある。（白峰社、A5判、287頁）